

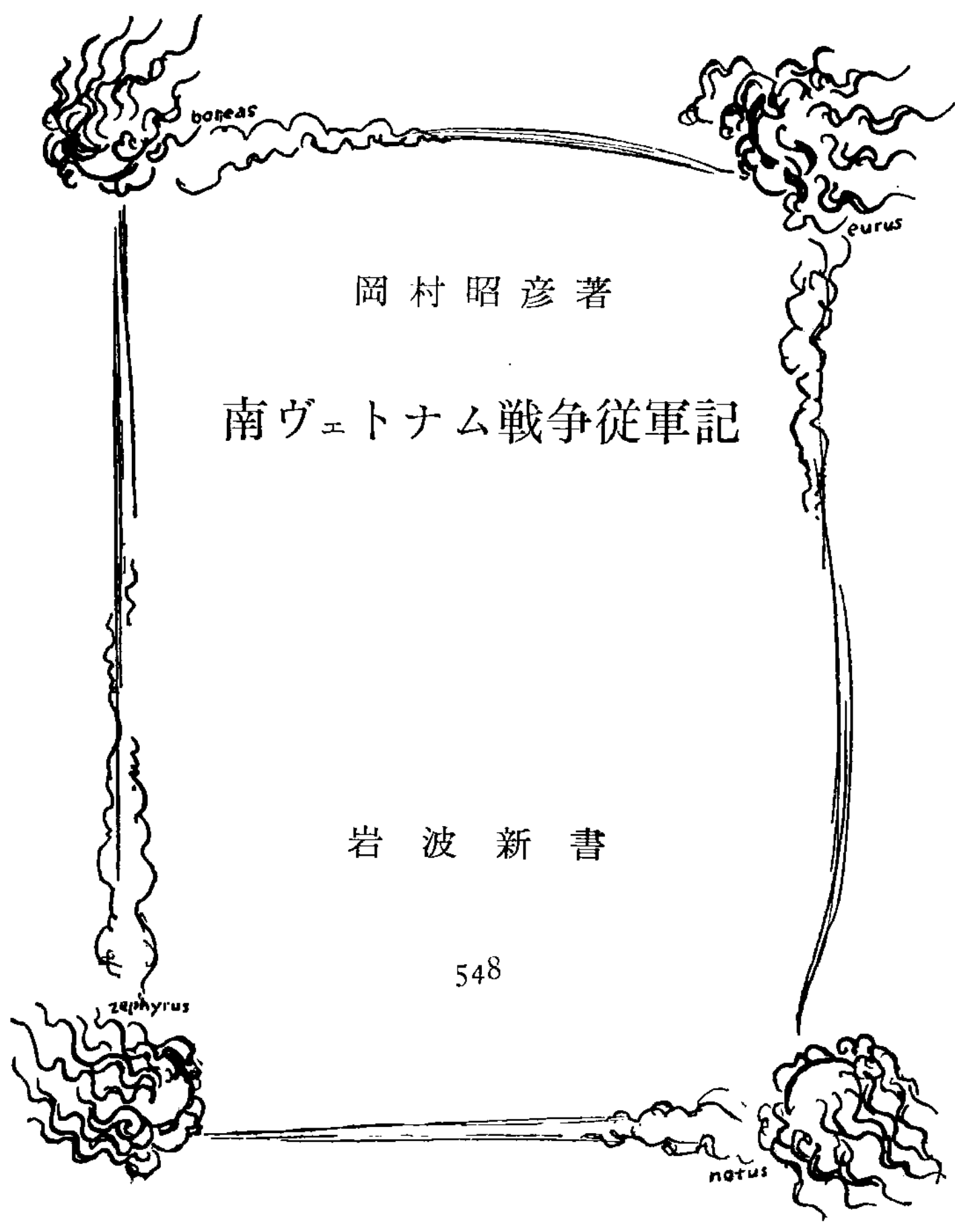
岡村昭彦著

南ヴェトナム戦争従軍記



岩波新書

548



岡村昭彦 著

南ヴェトナム戦争従軍記

岩波新書

548

岡村昭彦

1929年東京に生まれる

1944年東京中学卒業. 1946年東京医学
専門学校中退

1962年12月より, 南ヴェトナム戦争に
従軍. ほかに, タイ, ラオス, カンボ
ジア, 韓国等を取材

現在—PANA 通信社特派員

南ヴェトナム戦争従軍記

岩波新書(青版) 548

1965年1月27日 第1刷発行 ©

¥ 150.

著 者 おか むら あき ひこ
 岡 村 昭 彦

東京都千代田区神田一ツ橋2—3

発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都板橋区板橋町 6—3289

印刷者 白 井 知 一

発行所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
 神田一ツ橋2—3 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・永井製本

はじめに

たえがたく長い苦しいまわり道のはてに、やっと南ヴェトナム戦争の最前線にたどりついたとき、あるアメリカ軍将校が私を評して「まさにこの最前線司令部にまぎれこんできた、戦争について恐るべき無知の日本人新聞記者」といいました。まったくそのとおりです。そして、私はそのことをなによりも誇りに思います。しかし、この愛すべき千軍万馬のアメリカ人は、その「恐るべき無知」こそが、私をしてそのような最前線にあえて赴かした原動力であることを知ることができなかったのです。彼もまた、私たちの世代の日本人について、「恐るべき無知」のアメリカ軍人であるといわなければなりません。私は自分が戦争について、飢え以外のなんらの体験ももたない、無知な人間であることを知れば知るほど、生命を賭しても戦争を知りたいと決意しました。単に南ヴェトナムの砲火のなかのみならず、北は韓国から南はマレーシアまで、私をかりたてて歩ませたものも、一にこのゆえにであります。二度と武器をもつまいときめた私にとっての唯一の武器は、ちいさなカメラだけでした。戦争の無意味さを全世界に訴えるための精力のすべてを、私は一台のカメラに注ぎつくしました。しかし、どれほど全力を注ぎこんでも、なおかつ注ぎつくせないものがあることを、ますます強く私は感じさせられます。このような貧しい、しかもわれながら顔のあからむような個人的な記録を、おこがましくも発表することにしたのも、

要するにそのゆえです。

だが、そのはずかしさを押しだすことの勇気を、私はヴェトナムでも韓国でも、なにより痛切に教えられました。もしこれが日本であつたら、人の心も知らないやつだといって、たたき殺されるような深い憤怒と悲哀のなかで、彼らは私に「ここを写せ！」と叫ぶのです。「このおれを撮れ！」と迫るのです。そして、これこそ戦争をやめさせる最大の力であり、そのような民衆のいるかぎり、かならず平和はかちとられるという確信を、私はもつことができました。このような人間を殺そうとする者が存在するあいだは、私はぜったいにカメラのシャッターから指をはなすことにはないでしょう。この本が皆さんの心にとどくころ、私はふたたび南ヴェトナムのジャングルの奥にいるかもしれません。あるいはまた、アフリカのコンゴを気持ちがいのようにかけまわっているかもしれません。よしとえどのような運命が私を奪いさろうと、平和のためにたたかう人間のいるかぎり、私はその人たちのなかに生きつづけてゆきたいと思えます。とにかくいまは、一刻もはやく、一日もすみやかに、たたかいのつぼのなかに身を投じなければなりません。それでは皆さん、また会う日まで！ つぎにめぐり会う日、おたがいさらに絶望をくぐりぬけた人間として、やわらかく抱きあえますように。

一九六四年一二月 前線に帰る日に

岡村昭彦

i 頁	傷ついた兵士(乾季のメコン・デルタ, キエンロンの戦闘)
iv-v 頁	夫の死をなげく妻(中部ヴェトナム山岳地帯, ポリクロンの戦闘)
I	サワット中佐(ラオス, サバナケット市の右派軍下士官学校)
II	「ヴェトコンはあっちへ行ったよ」(雨季のメコン・デルタ, カントオ附近)
III	仏教徒の集会に参加したヴェトナム女子学生(サイゴン市, サーロイ寺院)
IV	行方不明になったアメリカ兵をさがす軍事顧問(メコン・デルタ, カマオ附近)
V	クーデターのあと銃殺されたゴー大統領の弟(サイゴン市, チイホア刑務所の中庭)
VI	李少年の墓の前でなげき悲しむ両親と弟(韓国, 雲川)
VII	解放区の農民を拷問する政府軍兵士(メコン・デルタ, カンボジア国境に2キロ)
VIII	戦死した友を運ぶ山岳民族兵(中部ヴェトナム山岳地帯, ポリクロンの戦闘)
IX	死せるデモ隊員にロザリオをつける(サイゴン市, 統合参謀本部前)

はじめに

I 戦場へのまわり道 2

日本人・サワツト中佐 21

II 南ヴェトナム前線へ 38

弾圧の嵐のなかで 66

III 母への手紙 75

スーニーとの再会 78

IV クーデターの足音 82

雨季のデルタをゆく 88

南ヴェトナムの夜明け 99

IX

VIII

VII

VI

V

アジアの何処かで

二度目の誕生日

射殺された李少年

韓国漁民の憤りと悲しみ

乾季のデルタ作戦

特別部隊と山岳民族

平和へつづく道

あとがき

—素人の戦争報道写真—

223

214

186

166

144

126

119

110



戦場へのまわり道

♥ 62年12月×日 タイにきてきょうで五日目。オフィスにゆくと、机のうえに絵葉書が二枚のっている。スーニーからのたよりだ！ 原稿便といっしょに東京から転送されてきたものだ。絵葉書は、彼女がアメリカにいることを証明するように、グランドキャニオン国立公園の雄大なカラー写真。投函したのはラスヴェガス。

絵葉書の一——《ハローといわずに、日本人のように、コンニチハ。お元気？ わたしはいま、ラスヴェガス。人生のゆく路をきめるギャンブルをしています。アメリカに残ろうか、それとも日本に住もうか、と。でも、そんな賭けではあてにならない。あなたもアメリカにいらっしゃい。こちらでいっしょに住みましょう。バンコックへゆくのは至急やめてください。もう、わたしのほうは会社をやめてしまいました。早くアメリカへきて！ 以下サンフランシスコの新しい住所。東京で過した三日間の休暇が忘れられないわ》

絵葉書の二——《もうバンコックにいつてしまったのではないかしら。このたよりがとどいてくれますように。どうぞ、ヴェトナムの戦争の写真に熱をあげないで、わたしに熱をあげることに！ アテンション！ 女はいつまでも待てないものよ。ニュース！ ニュース！ ニュース！

わたしは大きらい。女はニュースよりも、あなたのことだけ。グラウンドキャニオンで、長いあいだの垢をすっかりおとして、ゆっくり静養しました。とても色が白くなったわよ。物価高のアメリカでは、大食いのスーニーは、財布の底をのぞいて考えこんでいます。あなたの象さんより」例によって、虫眼鏡が必要なほどきちようめんな細字でつづられた彼女の英語の手紙を読んでみると、いかにも南の国の人間らしい、奔放で野性的な彼女の肉体のなかにある、きめのこまかい女らしさが感じられて、胸がせつなくなる。その神経質すぎるほどのきちようめんさは、彼女がオーストラリアのビジネス・スクールで学んだことと無関係ではないかもしれないが。

あたしのようにオーストラリアで勉強したりすると、しごととはとてもよくできるようになるけど、かえってそのために、どうしてもタイでは結婚する気持になれなくなってしまふの——これは東京の喫茶店での彼女の告白。毎月一回、かならず定期便のように彼女は日本にやってきた。そして、あるときは喫茶店で、あるときは私の部屋のソファで、彼女は彼女自身を生んだタイについて語った。夜一〇時ちかくに羽田につき、翌朝八時にはもう羽田をとびたってゆく。そんなとんぼがえりのような彼女の時間表では、夜を徹して語りあかしたとしても、あつというまに時間は消えさってしまふ。私は彼女をとおしてタイを知り、まだみぬ東南アジアの国々を想った。「わたしの父は中国人でしょう。それもいわゆるオーバークイ・チャイニーズの大金持ではないの。昼間は得意の英語だけをたよりに貿易商に勤め、無理をして私をオーストラリアの学校にやったのも、娘に自分のはたせなかった夢を託そうとしてのことなの。タイ人の母も、お金持の娘ではありません。二人をあわせても、タイでは大金持になったり、政治的によいポジションを

手にいれることはできないの。もしそれを望むなら、娘を政府のえらい人の第何号夫人かにするほかはないわ。でも、わたしの父はぜったいにそんなことができないの」私の部屋のソファで長い脚を組みながら、彼女はそんな話をした。やさしくほほえむとき、ほそ長く目尻のきれこんだ、それでいて柔和な顔は、うたがいもなく彼女の父親の大陸の血を思わせた。憤るとき、彼女の浅黒い顔は母親から受けついだインドネシア系の精悍さをみなぎらせ、白い歯をむきだし、大きな鋭い目玉をくりくりさせた。

そんな激しく変化するスーニーの表情をみつめながら、彼女のことばに耳をかたむけているたびに、私には、アジアの国々のたどりつつある道がけっして他人事だと思えなくなってきた。たまたま東南アジアから帰ってきた日本人たちが、タイやヴェトナムなどのことを、貧しい、おはなしにならぬ国として、おおげさに語るのをきくと、私はひどく反撥をおぼえた。開発がおくれているということだけで、さもそこに住んでいる人間までが低級未開だというふうに結論づけ、日本のことばかりほこらしげにいう人は、日本の近代化がたどった道が、いかに多くのアジアの国々の苦しみと犠牲によってきずかれているかを知らぬ、思いあがった態度であるとしたか、私は思えない。一〇〇年前のチョンマゲ時代から今日にいたるまでの、矛盾にみちみちた日本の歴史の歩みを思いおこすにつけても、フランスやイギリス・オランダなどの植民地支配に苦しみつづけてきた、おなじアジアの民族のことが、もうほとんどまったく忘れられようとしていることが気になってしかたない。私は東南アジアへゆこう。そして、日本自身のこととして、アジアの問題を深く徹底的に掘りさげる報道を、私の一生のしごととしてとりくもう。スーニーは、眠

っていた私をやり動かした。

「もし……あなたがバンコックでしごとをなさるようになれば、わたしはいまから日本のものを少しずつ買って、運んでおかなければならないわ。でも、バンコックはとても暑いし、いろんなことでいやになってしまわないかしら」と、スーニーは首をかしげる。

「いつてみなきゃわからないが、おそらくぼくは、東南アジアのニュースに熱中してしまうだろうと思うよ」と、私は答えた。

「あなたは、いつでも、ニュースね。わたしのほうはもう、じつのところ、バンコックがいやになってきたの」三日間の休暇を私の部屋で過ごした彼女は、そういう残して、買物かごをさげ、近所の商店に夕食のおかずを買いにいった。

タイでは、いわゆる血統のよいお金持の子弟たちは、ほとんどがイギリスやフランスなど、ヨーロッパの諸国に留学する。イギリスとフランスの二大支配国を手玉にとって独立を守りつづけてきたタイでは、なによりもまずそれらヨーロッパ諸国との交流が現実に必要なとされた。そのような必要から、タイのエリートたちはヨーロッパへ留学し、帰国すれば、たちにもっとも現実的な政治的役割や社会的地位が彼らを待ち受けている。家柄がよくないかぎり、クーデターでも起らなければ、まずぜったいにこのような上層部に一般市民層が顔をだす余地はない。政治の主流からはずれたこれらの階層は、実社会で独自の地位を開拓し確保するほかはない。だから、手近なオーストラリアに子弟を留学させる。日本に魅力はもつが、タイに帰ってから、日本語は役にたたない。日本に留学するのは、医学や自動車修理など、技術を身につけるのがせいぜいだ。

東西の冷戦の激化で、すさまじい援助合戦の波が、東南アジアにおしよせ、それぞれの国が急速な近代化の必要に迫られている。そのような潮流の渦まきのなかで、タイはアメリカの援助によって、たくみにめざましい発展をとげつつある。しかし、飛行場や道路はすばらしいものが出てきても、家庭内の封建的な要素はなかなか改革されない。そのことは、日本人自身がみずからの経験によって、知りすぎるほど知っていることだ。外国に留学し、その国からお嫁さんをつれてきた人のなかにも、タイの生活にもどると、第二、第三、第四の夫人を迎える例がたえない。タイに残って古い封建的な家庭に入るよりも、自由に外国に職を求めて結婚しようと考えるのは、スーニーばかりではないのだ。ジェット機に乗れば、ほんのひとまたぎで、ちがった国の、ちがった生活に入ってゆける時代だ。

それにしても、二〇世紀後半のこのスピードは、あつというまにスーニーをアメリカに運び、反対に私をバンコックに運んでしまった。私と彼女を結びつけたのも、ほかならぬこのスピードという、人類の進歩の産物であつたのに。

♥ 12月×日 スーニーへ手紙を書く。

—— 《きみがアメリカから東京へ葉書を送ったところ、ぼくの乗った飛行機は、もうバンコックに着いていて、ぼくは税関の検査台のうえに荷物を乗せながら、きみがどこからか、ひょっこり現われはしないかと、きよろきよろあちこちを見まわしていた。ラスヴェガスからの絵葉書は、きみのいないバンコックにいるぼくを追って、五日おくれで廻送されてとどいた。きみは元気かい？ 会社をやめたそうだね。ゆっくり休養するといい。いつか話していたように、このさい、

世界一周をするのも一つの方法だ。

バンコックはきょうが大晦日。汗を流しながら暑いお正月を迎えるのは、ぼくにとって初めて。今夜は、きみがいつか話をしてくれた、旧王宮前広場のお祭りを撮ることにしよう。もしきみがここにいれば、徹夜でいろいろと語りたいところだが。やはり一年の最後の日は、過ぎさった年を語るのにふさわしい日だし、またあすは元日、おまけにぼくの誕生日でもあるから。でも、手紙でそれを伝えよう。これを読むときには、バンコックを逃げだすまえのきみにかえって読むこと。きみはアメリカで新年を迎え、そのあと五日もすれば、バンコックのお正月もとどくわけだ。とりあえず、ぼくの近況と計画についてお知らせしよう。じつのところ、バンコックに着いてさっそく困ったのは、タイ語ができないことだ。あたりまえのことだが、タイの国ではタイ語ができなければなにもしない。朝食もコーヒーと半熟玉子二個、トーストにコナツツ・ミルクをぬったやつを、タイ人式にオフィスに出勤するまえに、大衆食堂でたべる。代金は五バーツ。コーヒーは日本にくらべて非常に安い。

ぼくの今度のしごとは東南アジア特派員。いままで勤めていた東京のPANA通信社との新しい契約にサインし、さっそくバンコックにやってきたわけだ。半年間はバンコック支局を中心に、あちこちを歩く。それから南ヴェトナムへ。しかし考えてごらん。日本にはあれだけの数の新聞やラジオ、テレビなどがあるけれど、一番近い、皮膚の色のおなじアジアからのニュースのほとんどは、日本人の手によらず、もっぱら外国の通信社に依存している現状だ。世界の先進国だ――などと威張ってみたところで、海外から日本に入り、日本人が知ることのできるニュースは、

ほとんど外人の目で見たものばかりさ。タイのように四方を異なる国にかこまれ、つねに外交を第一に考えることなしには生きられない国とちがつて、日本は周囲を海にかこまれた島国。報道の統制さえすれば、国民は完全なツンボ状態におかれてしまうことは、第二次大戦で日本人がいやというほど思い知らされた現実だ。親が毒を飲まされて殺され、子供もあやうく毒殺されるところだったとしたら、その子は、どんな安全なおいしい食物をたべるときにも慎重になるだろう。菓子の中かまで割って調べてみるにちがいない。ぼくたちだってそうだ。大人たちから毒入りの饅頭をめぐんでもらうのはごめんだ。自分たちの力で、ほんとうに血となり肉となる食物をつくり、二度と国民を毒殺しない、正しいニュースを日本に送り、世界に送らねばならない。ぼくがはっきり覚悟をきめ、東南アジア特派員としての契約を結んだのは、そのためだ。

「ニュース！ ニュース！ ニュース！ わたしは大きらい」というきみのお小言がきこえてくるような気がする。だが、もうしばらく辛抱してくれたまえ。愛とは、相手をより迅速に、より正確につかもうとする行為だ。愛するとき、人はもっともすぐれたニュース・マンになる。

そうだ、報告することがあった。ぼくはきのう、安ホテルをひきはらってタイ人の家の一室に移った。きみも知っているとおりの、のんきなぼくは、どんなところでも平気で寝る。ただ、つめたい水をさぶさぶかぶるアプナムだけは、なかなか慣れない。食物はなんでもOK！ バスや市電もOK！ 暑さもなんとかOK！ あとはきみがいないため、バンコックは不当に減点されている。

それにしても、きみが東京でヤキトリを一度に三〇本たいらげたときには驚いたが、ラオス料

理のニワトリ屋（ボクシング場の裏）にゆき、だれでも一羽ぐらいはぺろりとたべてしまいうのをみて、なるほどと思ったよ。大食いのスーニーさん！ いまごろきみはどこを歩いているのでしょうか。

新年おめでとう。ぼくらのために、よい年でありますように。

タイの象さんへ

アキヒコより

♥ 63年1月×日 天井のない屋根が、太陽でじりじり焼けている。寝苦しくて体を動かすことに、安物の組立ベッドがギーギーと鳴る。「メコン」というタイ国産のウィスキーが、まるで爆竹のように血管のなかをはねまわったおかげで、頭がわれるように痛い。窓のそとでは、大声でどなる女の声にまじって、平手打ちのパンパンという音がきこえ、子供がワァーワァー泣きだす。隣の家で飼っている家鴨が、一度にさわぎたてる。とても寝ていられる条件ではない。時計をみると、もう一二時。やれやれ、これがバンコックの元日で、おれの第三四回目の誕生日か。

昨夜は旧王宮前広場で、仏像に水をかけたり、お金を払って小鳥を夜空に放ったり、爆竹を鳴らしながらぞろぞろ歩いたりする人たちを写しているうちに、支局長とぼったり会い、つれの中語新聞の連中と朝六時ちかくまで飲んだ。これがひどくたたったらしい。ひどい下痢。しかし部屋にいてもしかたがないから、オフィスにいった安楽椅子に昼寝。蚊がうるさい。蚊とり線香を三つ焚く。二時間ばかり寝て、街へコーヒーを飲みにでる。でたついでにスーニーの家のあたりまでゆき、家のまえをゆっくり歩く。彼女のお父さんが、寝椅子に倚りかかって本を読んでいる。声もかけずに通りすぎる。彼女がいれば、当然声をかけるだろうが……。どうみても家は貧しい家庭の上の部としか思えない。